

2021年7月17日

年間第16主日

菊地功大司教 メッセージ

エレミヤの預言は、神が愛してやまない人間を、誰かに任せるのではなく、自ら牧者として守り養おうとするその行動を、いつくしみ深い神の「正義と恵みの業」であると記します。

パウロは、エフェソの教会への手紙で、イエスが隔ての壁を取り除き、異邦人とユダヤ人を一つの体に一致させたことを述べ、それが平和の実現であると説きます。まさしく多様性における一致こそが、平和をもたらす道である事が示唆されています。

イエスの時代、エルサレムの神殿において、ユダヤ人以外の異邦人は、「異邦人の庭」と呼ばれた神殿の外庭まで入ることがゆるさされていました。そこには「隔ての壁」があったといわれます。そのことから、「隔ての壁」は、ユダヤ人が受ける神の祝福から異邦人は切り離されていることを象徴し、さらに、対立の中に生まれる「敵意」をも象徴していました。

マルコ福音は、先週の続きで、福音宣教に派遣された弟子たちが共同体に戻り、宣教活動における成果を報告すると、イエスは観想の祈りのうちに振り返るように招かれたと記します。

イエスご自身も、朝早くまだ暗いうちに、人里離れた所に出て行かれ、一人で祈られたことが他の箇所にも記されています。善い牧者として、義に基づいた神の平和を実現するというご自分の使命をはたす力を、イエスはその観想の祈りから得ておられたのは、間違いありません。

教皇ベネディクト 16 世は、回勅「神は愛」に、「教会の本質は三つの務めによって表されます。神のことばを告げ知らせること、秘跡を祝うこと、愛の奉仕を行うこと」（回勅『神は愛』25参照）と記します。神のことばを告げ知らせる宣教の前提には、秘跡を祝う

典礼や祈りを大切にする共同体がなければなりません。秘跡を祝う共同体は愛の奉仕へと突き動かされていきます。そもそも愛の奉仕とは、主イエス・キリストの生き方に倣い実践することなのですから、わたしたちは祈ることをないがしろにして、愛の奉仕に努めることは出来ません。

教皇フランシスコは、2月3日の一般謁見で、次のように述べておられます。

「祈りもまた行事であり、出来事であり、現存であり、出会いです。まさにキリストとの出会いです。・・・典礼のないキリスト教は、キリストがおられないキリスト教になってしまいます」

東京教区の宣教司牧方針の二つ目の柱は、「交わりの共同体」を育てることです。教会の本質は「交わり」です。信仰の共同体の中に生じる「交わり」は、父と子と聖霊の交わりの神の写し絵です。「交わり」を造りあげ、それを豊かにしてくれるのがわたしたちの共同体で行われる典礼であり、祈りです。多様化した社会にあって、できる限り多くの人をわたしたちの「交わり」へと招き入れるために、典礼を豊かにし、共同体の祈りを深め、そこから福音を告げしらせ、またあかしするための力をいただきましょう。

宣教司牧方針にこう記しました。「わたしたちの信仰は「賛美」と「喜び」に彩られています。そのどちらも人間の想いで始まったものではありません。天上の教会では主イエス・キリストを中心に聖母マリア、諸天使、諸聖人、そして地上のいのちを終えたすべての被造物が天の御父を「賛美」し、「喜び」に満たされています。その「賛美」と「喜び」の声に合わせて地上の教会のわたしたちも神を「賛美」し、いのちの「喜び」を共同体と共に表すのです。典礼と祈りは「賛美」と「喜び」の時であり場面です」

言葉と行いを通じたあかしを、祈りと観想からいただいた力のうちに実践いたしましょう。